

【共同研究】

スウェーデン人および社会人と比較した 日本人大学生の自己意識の特質について

大塚 明子* 秋山 美栄子** 森 恭子*** 星野 晴彦****

The characteristic of self-consciousness in Japanese college students compared to Swedish and Japanese adults

Meiko OTSUKA, Mieko AKIYAMA, Kyoko MORI, Haruhiko HOSHINO

We analyzed overall differences in the Cultural View of Self (Markus & Kitayama [1991]) of Japanese and Swedish people in joint comparative research (Otsuka, Akiyama, Mori and Hoshino [2011b]). In this paper, we looked closer at age differences in particular. On the whole, we found that age has much more of an impact in Japan than in Sweden. Japanese students have far less self-esteem and interpersonal trust than adults and are far more sensitive to other people's feelings and their evaluation of themselves. According to cluster analysis, Japanese college students fell into four distinct groups.

Key words : self-esteem, interpersonal trust, cultural view of self, Sweden, comparative research
自尊感情、対人信頼感、文化的自己観、スウェーデン、比較調査

0. 問題意識：自信と信頼の低い日本の大学生

大塚・秋山・星野・森の4名が、人間科学部の30周年記念プロジェクトの一環として行ってきた日本とスウェーデンの比較調査の成果は、2011年度に計3本の共著論文として発表している。その中でも、大塚が筆頭著者となった「「集団主義の日本」と「個人主義のスウェーデン」の再検討～心理尺度を用いた比較調査を通じて～」では、主に文化的自己観 (Markus & Kitayama [1991]) に関する両国の差について、相互独立

的—相互協調的自己観尺度の短縮版 (高田 [2000]) を使用して検討した。

高田が同尺度の原版を用いて大学生を対象に実施した比較調査によれば、日本人はヨーロッパ系のオーストラリア人とカナダ人に比べて、相互独立性が低く相互協調性が高かった。全体的な傾向として、相互協調的自己観が支配的な日本、相互独立的自己観が優勢なオーストラリア・カナダ、という文化の差が個人にも反映されていると結論づけている (高田 [2004:146-47])。

しかし、我々の調査では方向性の異なる結果がえられた。相互独立性に関しては、日本3.96<スウェーデン4.88と大差があり (p<.001)、欧米のほうが高いという従来の知見が再認された。他方で、相互協調性のほうは、日本4.67≒スウェーデン4.59で、有意差がなかったのである。特に2つの下位尺度の1つである評価懸念の2設問をみると、問1「人が自分をどう思っているかを気に

* おおつか めいこ 文教大学人間科学部人間科学科

** あきやま みえこ 文教大学人間科学部心理学科

*** もり きょうこ 文教大学人間科学部人間科学科

**** ほしの はるひこ 文教大学人間科学部人間科学科

する」では差がなく、問3「相手は自分のことをどう評価しているかと、他人の視線が気になる」ではスウェーデン人のほうが高かった ($p<.001$)。こうした結果に関して、我々は日本人の「内固外柔」とスウェーデン人の「内柔外固」という解釈を提示した。スウェーデン社会では、相互独立性の高さから伺えるように、自他に対し一貫した自己像を提示すべし、という価値観があると想定される。こうした「強い自己」としてプレゼンテーションしつつ、致命的な誤りを避けるためには、外に態度や意見を表明する前に、十分慎重に検討しておく必要がある。このため繊細に他者の視線をセンシングせざるをえない。これに対し、日本社会では、外的な態度や行動において他者と調和的であるべし、という暗黙の圧力が強いと思われる。このように最初から同調的に構えているため、相手の視線をその都度微細に読み取る必要が少ないと推測できる。

だが、この解釈は、グループや年代の差を考慮に入れてさらに検討する必要がある。我々の調査では、大学生・中高の教員・福祉施設の職員という3つのグループを設定し、2010年にスウェーデンで計289名、日本で計376名から調査票を回収した。大塚他(2011b)では、国およびグループ間の違いについて分散分析を行っている。結果として、相互独立的一相互協調的自己観尺度・自尊感情(Rosenberg [1965])・対人信頼感(堀井・樋谷 [1995])の3つの心理尺度に関して、日本の大学生が他のグループより顕著に低い値を示すことが分かった。

そこで本稿では、さらに年齢という要因を導入し、特に国内での本調査の対象とした文教大生に焦点を当てて、彼らがスウェーデン人や日本の社会人と比べてどのような固有性をもつのかを分析する。この作業を通じて両国の社会・文化差をさらに明らかにしたい。以下では、1.で自尊感情・2.で対人信頼感に関する国・グループ・年齢の影響について述べ、3.でそれを踏まえて文化的自己観に対してさらに考察を加える。

文教大生に対しては、2010年12月の授業中に追加調査を行った。相互独立的一相互協調的自己観尺度の原版(20問)と短縮版(10問)をラン

ダムに配布し、計198名の回答をえた。4.では本調査と追加調査の327サンプルに対してクラスタ分析を行い、本学の学生の特質をさらに浮き彫りにしたい。

1. 自尊感情

(1) 本調査における日本の大学生の低さ

Rosenbergの自尊感情尺度に関しては、先行研究の多くが、問8「もっと自分自身を尊敬できるようにになりたい」が他の設問と同じ方向性とはいえないと指摘し、除外して残り9問で尺度を再構成している(伊藤・小玉 [2005]・新見他 [2007]・佐久間・無藤 [2003] など)。我々も因子分析(最尤法)を行ったところ、本調査では問8の因子負荷量が.35、追加調査は-.17だった。そこで本稿でもこの設問を外すことにする。これに伴い信頼性(Cronbachの α)も、前者が.899から.909へ、後者が.837から.869に改善する。

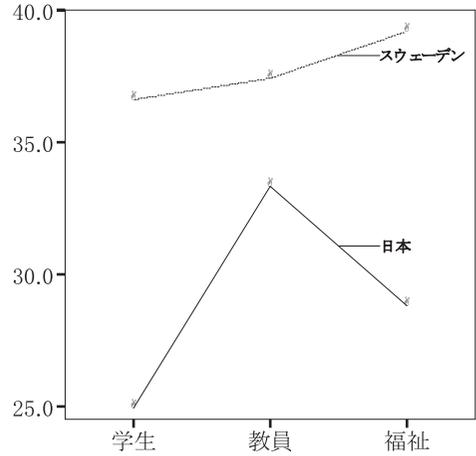
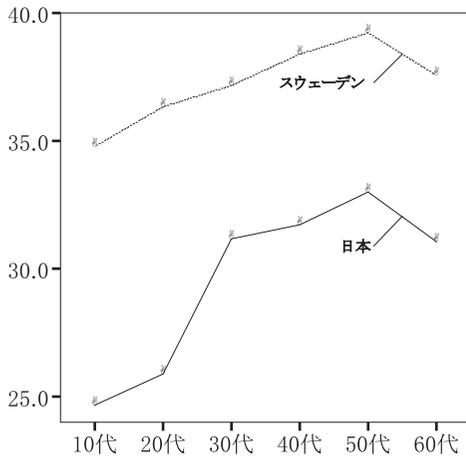
この8除外版の全体の平均値は、日本29.4(SD7.5) < スウェーデン37.5(SD5.4)とかなり大きな差がある ($p<.001$)。次に、10年ごとの年代およびグループによる差は以下の通りである(グラフ1)。

日本でもスウェーデンでも、10~50代にかけて年代とともに上昇し、60代で低下する、という傾向が共通して伺える。先行研究でも、自尊感情は高校生より大学生のほうが高いという知見がある(河地 [2005]・松岡 [2006])。年齢を重ねて様々な経験を積むことで自信が付き、自己を肯定する気持ちが高まるのではないだろうか。

本調査の平均年齢は、日本36.5才(SD14.9) < スウェーデン39.1才(SD13.7)と有意差がある ($p<.05$)。この約2.6才の差が、両国の自尊感情の平均値の違いをより拡大していると思われる。

60代は全体の6.8%と少ない(日本の福祉に13名、スウェーデンの教員・福祉に計31名)。この年代での自尊感情の低下については、退職し嘱託に移行するなど、社会的役割の変化が関係している可能性が考えられる。だが、本調査からはこれ以上分からない。

50代以下で自尊感情が加齢とともに上昇する



グラフ1 自尊感情

傾向が一般的だとしても、上のグラフからは、日本のほうがスウェーデンより年齢の影響力が強いことが推測される。二元配置分散分析では、国と年代に主効果が認められ ($p < .001$)、交互作用も有意だった ($p < .05$)。国別に分散分析→多重比較 (Bonferroni法) を行ったところ、日本では、10代・20代と30代以上の2つに分かれ、異なるグループに属する全年代間に有意差があった ($p < .001$ 、各グループ内にはなし)。他方、スウェーデンでは、最低の20代と最高の50代の間のみ有意差があった ($p < .05$)。50代以下に限定した自尊感情と年齢の相関係数は、日本が.47**、スウェーデンが.24**である。

二元配置分散分析では、国とグループに主効果が認められ ($p < .001$)、交互作用も有意だった ($p < .05$)。国別の分散分析→多重比較 (Bonferroni) の結果は、3グループ全ての間には有意差があり (全て $p < .001$)、教員33.3 (SD6.7) >福祉28.8 (6.7) >学生24.9 (7.0) の順に高い。これに対し、スウェーデンでは福祉39.2 (5.7) >学生36.6 (5.4) の間にのみ有意差があり ($p < .05$)、教員は37.4 (5.0) で中間にある。ここでも年代と同様、日本のほうがスウェーデンより国内のグループ差が明確で、標準偏差も大きい傾向がある。

自尊感情と年齢の関係は線形でないことが分かったので、50代以下に限定して重回帰分析を行うこととする (強制投入法)。属性は、まず国

籍ダミーに加えて、学生ダミー・教員ダミー・性別ダミー・年齢・同居パートナーの有無ダミー・子供の有無ダミー・出生地ダミー (海外生まれか否か) を投入する。心理尺度は、相互独立性・相互協調性、および対人信頼感を独立変数とする。

QOL (Quality of Life) (WHO) の26問は、身体・心理・社会的関係・環境、および全般的な評価である全体の5つに分けられる。ここでは各領域の影響力をみるため、平均でなく、下位尺度を投入することとする。ただ、このうち心理は、「自分の容姿 (外見) を受け入れることができますか」「自分自身に満足していますか」という自尊感情尺度とかなり重なる設問を含んでいる。相関も5つの下位尺度中で最も高かった (日本.72**、スウェーデン.59**)。このため除外することとする。

まず全体で、次に国籍を外して両国それぞれで分析を行った。結果を表1に示す。

全体の分析では、国の違いが最も大きな影響力をもつことが分かる。全てに共通するのが、QOLでは社会が大きな係数もち、環境が有意とならないこと。また相互独立性と対人信頼感が正、相互協調性が負の関連を示すことである。

国別にみると、スウェーデンでは、QOLの全体と社会・対人信頼感が有意となり、相互独立性も有意傾向にある ($p = .052$)。分散分析で示された年代やグループの差は、これらの心理尺度に吸収されて消えてしまう。また同居パートナーがいる

表1 自尊感情の重回帰分析 *数値は標準化係数 β

	全体	日本	スウェーデン
国籍ダミー	.230***		
学生ダミー	.026	-.032	-.006
教員ダミー	.194***	.277***	.010
性別ダミー	-.007	-.004	-.065
年齢	.148**	.158*	.079
同居パートナーの有無ダミー	-.026	-.049	-.145*
子供の有無ダミー	.063	.058	.146
出生地ダミー	.037	.005	.063
QOL (全体)	.157**	.079	.259**
QOL (身体)	.129**	.200*	.011
QOL (社会的関係)	.182***	.206***	.202**
QOL (環境)	.016	.054	.017
相互独立性	.180***	.215***	.128
相互協調性	-.074*	-.070	-.090
対人信頼感	.089**	.085	.169*
調整済み R2 乗	.604	.564	.290
N	497	312	185

***=p<.001, **=p<.01, *=p<.05

ことが負の影響をもつが、これは解釈が難しい。

これに対し、日本は、QOL社会と相互独立性が正の関連をもつのがスウェーデンと共通の傾向だが、他はかなり異なる。

その1つは、QOLの身体領域が社会的関係とほぼ同じ係数を示すこと。これは問17「毎日の活動をやり遂げる能力に満足していますか」、および問18「自分の仕事をやる能力に満足していますか」の影響が大きいと思われる。この2問と自尊感情の相関係数は、日本のほうがスウェーデンより.1以上大きい。日本人の自尊感情は、外的な達成により大きく依存しているということだろう。

スウェーデンとのもう1つの違いは、年齢および教員であることが有意になったこと。つまり本調査の対象者では、QOLなどの高低とは別に、若さそれ自体が自尊感情を低めていることになる。また教員の身分がプラスの影響を及ぼすことから、日本人の自尊感情が、スウェーデン人より社会的地位に大きく左右される可能性が考えられる。この推測が妥当だとすれば、大学生は、年齢

と地位という点で二重に不利な立場におかれることになる。

(2) 追加調査を含めた先行研究との照合

ここで本調査を離れ、文教大生の自尊感情のあり方について、追加調査も含め、先行研究と照らし合わせてさらに検討したい。

1.で述べた通り、追加調査では、相互独立的-相互協調的自己観尺度の短縮版(10問)と原版(20問)の両方を実施した。前者91名をAグループ、後者107名をBグループとする。質問紙は同じ授業内でランダムに配布したのだが、結果として、本調査とAの平均年齢がともに約19.5才なのに対し、Bは20.2才で有意差が出てしまった。おそらくこの年齢差も影響して、自尊感情(問8除外版)の平均値も、既述した本調査の24.9に対し、Aが25.9(SD7.2)、Bが27.4(6.9)で、本調査とBの間に有意差があった(p<.05)。全体では26.0(7.1)となる。

日本の若者を対象にRosenberg尺度を用いて行

われた先行研究をみてみよう。菅（1984）は、1975年～80年代前半に4段階法による調査を積み重ねた結果、青年の平均値は25当たりだと述べている（24）。1998～99年に藤野らが菅訳を用いて群馬県の四大生・短大生を対象に実施した調査でも、25.4と一致していた（藤野・林・前田・深川[1999]）。我々の調査は5段階法（山本・松井・山成[1982]）のため厳密には比較できないが、単純に10/9倍すれば27.8となる。

以下に、本調査も含め、大学生を対象に5段階法を用いた近年の調査の平均値を一覧表にして示す（表2）。

表2の大学生全体の平均値は、原10問版で27.9

から32.6、問8除外版では26.0から29.9の範囲にある。我々の日本の社会人サンプルの平均値は、原版が教員35.8・福祉31.3、除外版で教員33.3・福祉28.8である。大学生の最大値でも、本調査の教員より低い。日本人の自尊感情が年齢や社会的地位の影響を強く受けるという推測は、ここでも支持されるといえよう。

文教大生は、表2にある他の全ての大学生より低い。

大塚他（2011b）では、Heine（1999）と比べた本調査の大学生の自尊感情の低さについて、ありうる解釈を2つ示した。第1は時代効果である。（1）の重回帰分析でも示した通り、文化的自

表2 近年の大学生調査における自尊感情の平均値（***=p<.001, **=p<.01, *=p<.05）

①原10問版

年	調査対象	平均値	出典
1999	日本人大学生 1657名	全体 31.1 *単純な×0.9=28.0	Heine (1999) →高田 (2004) より引用
2001	都内の私立大学 新入生 165名	全体 30.6 (SD6.7) *単純な×0.9=27.5	塩澤 (2008)
2001 発表	愛知県の大学生 195名	全体 32.6 (SD5.8) *単純な×0.9=29.3 男性 33.5 (SD6.1) >女性 31.9 (SD5.5) *	小塩 (2001)
2002 発表	大学生 235名	全体 30.8 (SD6.9) *単純な×0.9=27.7	鈴木 (2002)
2004 発表	大学生 181名	全体 32.1 (SD7.1) *単純な×0.9=28.9	黒田・有年・桜井 (2004)
2005 発表	地方都市の総合大 学・文学部 47名	全体 29.7 (SD7.0) 男性 31.0 (SD5.4) 女性 29.0 (SD7.8)	山崎・三宅・橋本・平・松 田 (2005)
2006 発表	関西のM大・N大 女子学生 476名	女性 31.7 (SD7.5)	豊田 (2006)
2006	関西の大学生 165名	全体 30.2 *単純な×0.9=27.2	桂田 (2009) *おそらく関西学院大
2010～11	文教大 327名	全体 27.9 (SD7.1) 男性 28.7 (SD7.2) ≒女性 27.6 (SD7.0)	本調査

②問8除外版

2000～01	首都圏の6大学 742名	男性 29.9 (SD6.6) >女性 28.9 (SD6.7) *	佐久間・無藤 (2003)
2004	筑波大 220名	全体 29.6	伊藤・小玉 (2006)
2010～11	文教大 327名	全体 26.0 (SD7.1) 男性 26.5 (SD7.2) ≒女性 25.8 (SD7.0)	本調査

己観尺度の相互独立性は、自尊感情にかなり影響を与える。他方で、1994～2003年に継続して同一の大学で実施した調査では、相互独立性の低下と相互協調性の上昇という傾向が一貫してみられた(高田[2004:215])。これらを考え合わせると、相互独立性と連動して、大学生の自尊感情もここ10年低下傾向にある可能性がある。第2は、いわゆる「大学ランキング」などの大学間の差異が自尊感情に影響している可能性である。

表1をみる限り、自尊感情が総じて低下しているという傾向を読み取ることはできず、第1の解釈は成立しない。現時点では、第2の解釈のほうが有望といえる。自尊感情と文化的自己観の長期的な動向については、今後の課題としたい。

2. 対人信頼感

次に、対人信頼感についても、自尊感情とかなり似た傾向が見出される。まず国別の平均値は、日本50.8 (SD9.1) <スウェーデン54.1 (11.1) で有意差がある ($p<.001$)。年代とグループ間の差を以下に示す(グラフ2)。

国×年代の二元配置分散分析では、両者に主効果が認められ(前者 $p<.01$ 、後者 $p<.001$)、交互作用はなかった。次に国ごとに分散分析→多重比較(Bonferroni法)を行ったところ、日本では自尊感情と同様、10代・20代と30代以上に分かれ、両者の間に有意差があった。スウェーデンでも同じく、20代と50代の間にのみ有意差があった

($p<.05$)。

国×グループの二元配置分散分析では、両者とも主効果が認められ($p<.001$)、交互作用はない。国ごとの分散分析→多重比較(Bonferroni法)では、日本の学生と教員・福祉の間にのみ有意差があり($p<.001$)、スウェーデンではなかった。

前説の自尊感情と同様に重回帰分析を行ったところ(ただし、ここではQOLの心理領域も投入した)、結果は以下ようになった(表3)。

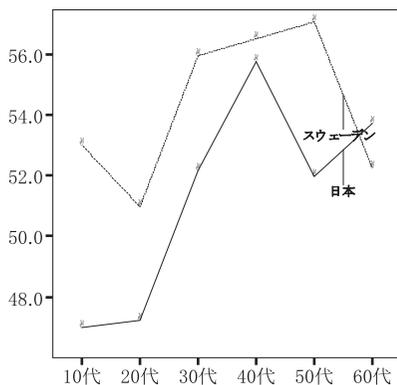
国別のT検定では大差があったにも関わらず、重回帰分析では国籍が有意とならなかった。どの場合にも共通するのは、自尊感情が大きな正の関連をもつことである。また年齢、QOLの全体・心理・環境、文化的自己観尺度はいずれも有意にならない。

日本の著しい特質は、大学生であることが対人信頼感を大幅に下げることである。スウェーデンでは年齢やグループがそれ自体で負の影響を及ぼしていないのに、日本の若者はなぜこうした否定的な状況を示すのか。真剣に考えるべき問題ではないだろうか。

3. 文化的自己観

(1) 本調査の国と年代による差異

既述の通り、相互独立性は日本3.96<スウェーデン4.88と、かなり大差がある($p<.001$)。他方で、相互協調性は日本4.67≒スウェーデン4.59で、有意差がなかった。それぞれを年代別にみると次



グラフ2 対人信頼感

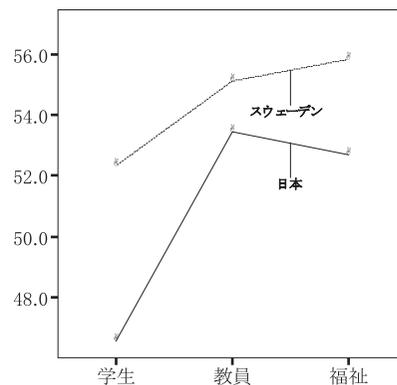
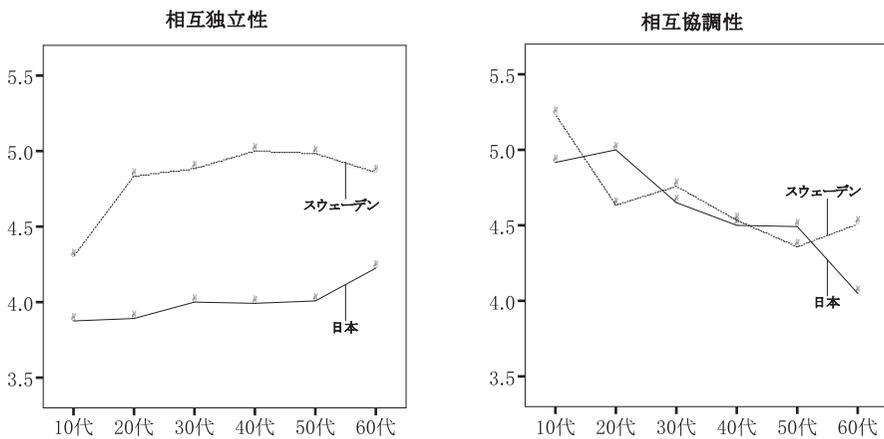


表3 対人信頼感の重回帰分析

	全体	日本	スウェーデン
国籍ダミー	-.030		
学生ダミー	-.274***	-.294**	-.138
教員ダミー	-.067	-.072	.032
性別ダミー	.136**	.064	.257***
年齢	-.054	-.153	.060
同居パートナーの有無ダミー	.112*	.168	.082
子供の有無ダミー	-.026	.028	-.099
QOL全体	.014	-.061	.119
QOL身体	.164**	.152	.156
QOL心理	-.094	-.099	-.039
QOL社会	.112*	.188**	.020
QOL環境	.114	.081	.104
相互独立性	-.037	-.058	-.019
相互協調性	.016	-.043	.059
自尊感情(問8除外)	.234***	.198*	.219**
調整済み R2 乗	.255	.245	.262
N			



グラフ3 文化的自己観

の通りである（グラフ3）。

国×年代の二元配置分散分析で、相互独立性は国のみ有意である（ $p<.001$ ）。これと対照的に、相互協調性は国による差がなく、年代（ $p<.001$ ）および国×年代の交互作用（ $p<.05$ ）が有意となる。すなわち、前者は日本とスウェーデンの社会・文化の違いに係わるが、後者は主として年齢の問題と考えられるのだ。

ところで大塚他（2012）で述べた通り、この文化的自己観尺度に因子分析を行うと、日本とスウェーデンでは同一の結果がえられない。そこで本稿でも設問ごとにさらに検討することとする。

日本国内の年代およびグループ間の差異の有無で全10問を分けると、ちょうど半数の5問ずつとなる。まず有意差なしの設問からみると、相互独立性は4問中の3問がここに入る（グラフ4）。

具体的な質問文は、

2「自分でいいと思うのなら、他の人が自分

の考えを何と思おうと気にしない」

4「自分の周りの人が異なった考えを持っていても、自分の信じることを守り通す」

7「自分の意見をいつもはっきり言う」

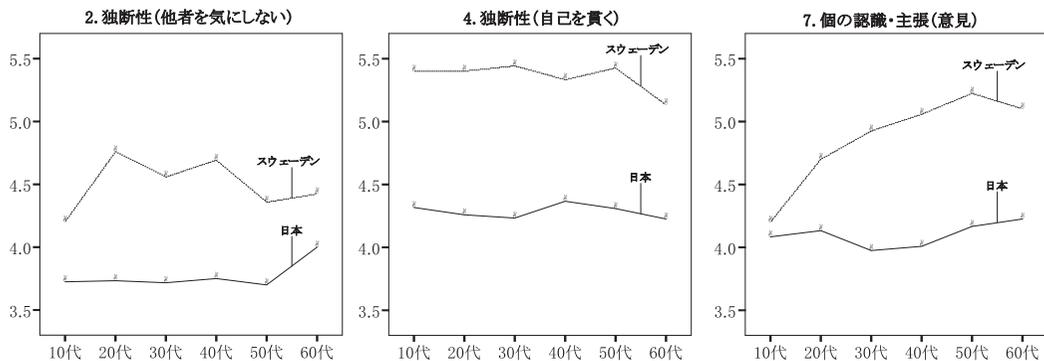
である。国×年代の二元配置分散分析の結果、この3問は全て国の主効果しかない。日本国内には性差もない（2のみ男性>女性の有意傾向がある）。つまり、年代・性別によらず、日本人とスウェーデン人の一般的な差異、ひいては日本文化の固有性を浮き彫りにする設問といえよう。

次に、相互協調性の6問のうち日本国内に年代・グループ間の有意差がなかったのは、オリジナルで他者への親和・順応の下位尺度に属する2問である（グラフ5）。

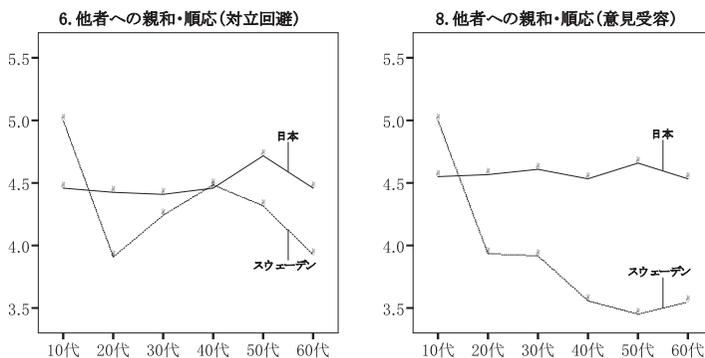
具体的な質問文は、

6「自分の所属集団の仲間と意見が対立することを避ける」（女性>男性の有意差あり）

8「人と意見が対立したとき、相手の意見を受



グラフ4 日本国内の有意差なし①（相互独立性4問中の3問）



グラフ5 日本国内に有意差なし②（他者への親和・順応6問中の2問）

け入れることが多い」

である。このうち問6は、国×年代の二元配置分散分析で全く有意差が出ない（グラフではスウェーデンの10代が飛び抜けて高いが、5名と数的に極めて少なく、外れ値とみなすべきかもしれない）。つまり、スウェーデン人も日本人と同程度に、また年代に関わりなく、対立回避の姿勢をもつことになる。対照的に問8は日本のほうが顕著に高い。

この2つを考え合わせると、スウェーデン人は、可能な限り仲間との同調を志向するが、どうしても回避できず対立が露呈してしまったら、その後は一転して自らの意見を堅持するということだろう。スウェーデン社会には、周囲への同調という集団主義的な規範と、自己の一貫性の提示という個人主義的な規範が並立しているが、両者が競合する場合は後者を優先すべしという価値観が共有されているのではないだろうか。

これに対して日本人は、いったん対立が顕在化した後も、自分の意見を調整して周囲と一致させようとする。同調という規範が圧倒的な優位にあるといえよう。元来、相互協調的自己観とは「個別的な文脈における他者との関係が自己を定義する特性として用いられるため、自己境界の内部に他者が含まれる」ことである（Markus & Kitayama [1991:245-46]）。「周囲と調和している自分」が自意識において鍵となるため、これを脅かす行動は強く回避されるのだろう。

次に、日本国内で年代・グループ間に有意差がある残り5問について。うち4問は年齢が低いほ

ど高く、従って学生が社会人（教員・福祉職）よりセンシティブな方向に有意差がある。オリジナルで評価懸念の下位尺度に属する2問は全てこのカテゴリに入り、しかもスウェーデン人が日本人と変わらず、あるいはそれ以上に他者の評価を気にする傾向を示している（グラフ6）。

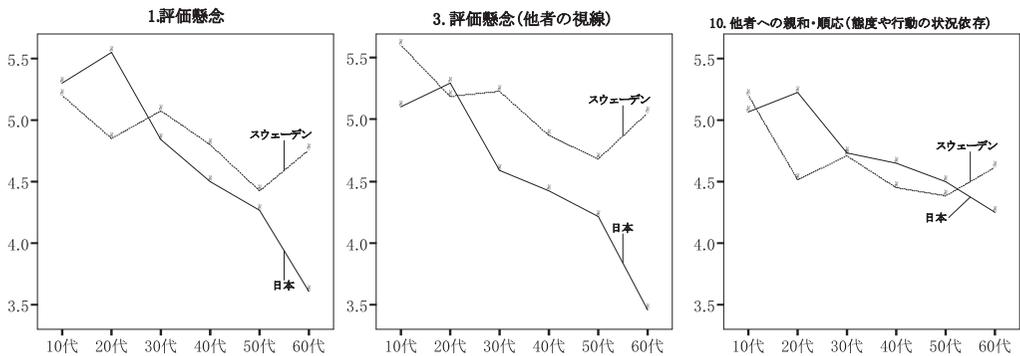
具体的な質問文は、

- 1「人が自分をどう思っているかを気にする」
- 3「相手は自分のことをどう評価しているかと、他人の視線が気になる」
- 10「相手やその場の状況によって、自分の態度や行動を変えることがある」

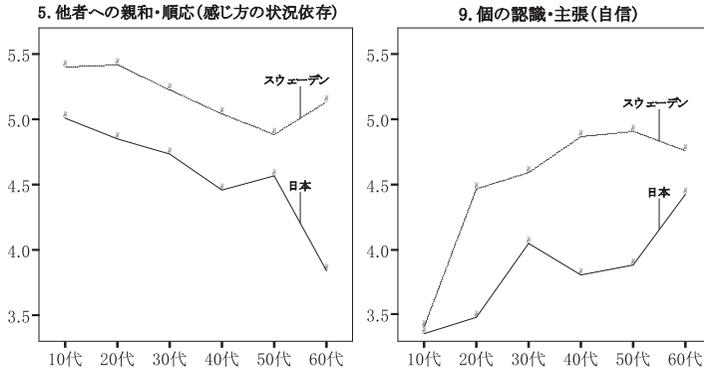
である。国×年代の二元配置分散分析の結果、10と1は国による有意差がなく、年代の主効果と両者の交互作用（10は有意傾向）がある。スウェーデン人が日本人と同程度に、状況に応じて自分の態度や行動を変えるというのは、一見上述の2や4と矛盾するように思える。しかし、あまり重要でない表面的な態度や行動については同調的でもかまわないが、深い中核たる「自分でいいと思う」「自分の信じるどころ」は譲らず一貫すべし、という軽重の差として解釈できよう。

3は二元配置分散分析で全てに有意差があり、スウェーデン人のほうが他者の視線を気にする傾向が強い。もっとも学生に限定したT検定では有意差がなく、若者がこうした意味でセンシティブなのは、おそらく万国共通なのではないだろうか。いずれにせよ、この3問は、日本の相互協調的自己観を抽出しうる設問とはいいいがたい。

さらに国別一元配置分散分析を行うと、日本



グラフ6 日本国内に有意差あり①



グラフ7 日本国内に有意差あり②

は3問とも年代差があるが(いずれも $p < .001$)、スウェーデンはいずれも有意差がなかった(ただし3は $p = .81$ で有意傾向)。つまり、他者の視線や評価に対する青年期の敏感さを、スウェーデン人は社会人になってもかなり維持し続ける。特に20代と30代では、グラフでみてもほとんど差がない。これは調査対象の大学生の平均年齢が高かったことによるのではなく、30代をグループ別にみても差はない。これに対し、日本人は、社会人になると急速に評価懸念が低下し、スウェーデン人と比べて他者の視線に対し鈍感になっていく。

最後に、二元配置分散分析で国と年代の両方に主効果が認められた2設問をあげる(交互作用はなし)。

具体的な質問文は、

5「自分がどう感じるかは、自分が一緒にいる人や、自分のいる状況によって決まる」

9「いつも自信をもって発言し、行動している」である。5は内的な感情に関する設問で、この点ではスウェーデン人のほうが周囲の雰囲気敏感である。さらに国ごとの一元配置分散分析では、1・10と同様に、日本だけ年代差があった($p < .5$)。9は唯一、年齢とともに上昇する設問である。もっとも国ごとの一元配置分散分析の結果、スウェーデンは有意傾向しかなく($p = .94$)、少数の10代を外れ値とみなせば、自信をもつことに年齢差がないのかもしれない。日本は10代の学生が30代以上より自信がない($p < .05$ 、少し落ちる40代のみ例外)。これは自尊感情の低さからも頷ける傾向だ。

以上の結果を整理すると、「相互独立性が優勢な欧米／相互協調性が優勢な日本」という元来の想定は、前者では全4問に当てはまるが、後者は6問中、対立時の相手の意見受容に関する1問のみである。他者の視線への懸念と内的な感じ方の状況依存はスウェーデンのほうが高い。対立回避は全く有意差が見出されず、評価懸念と外的な態度や行動の状況依存の2問は、国に違いがなく年齢の問題である。

加齢による変化を考え合わせると、次のようにまとめられよう。すなわち、スウェーデン人は、相互独立性が日本人より顕著に高く、相互協調性も日本人と同程度に高い。日本の大学生は、前者が低く後者が高い。そして日本の社会人は、相対的にみるとどちらも低い。

(2) 日本の若者と社会人の差異に関する考察

相互独立的—相互協調的自己観尺度の作成者である高田は、この尺度を総計で約9千人に実施してきた結果を次のようにまとめている：相互独立性は、小学校から中学生にかけて低下し、大学生まで低水準にとどまった後、若年成人から老人期まで上昇する。これに対し、相互協調性は、やはり小学校から中学生にかけて低下するが、中学校から大学生にかけて上昇し、成人期に再低下した後、老人期に再上昇する(高田 [2004:158])。すなわち、「日本文化に特徴的な相互協調性の高さ」と相互独立性の低さは、青年期に典型的で、成人はこうした傾向を「成人は少なくとも尺度値の上では示さない」(ibid.163)。

本調査でえられた知見も、大卒では同様の加齢に伴う推移を示唆しているといえよう。では、日本の成人がいわば「日本的」でないことをどう捉えたらよいのか？

高田は、成人期には、青年期に確立した相互協調性を基盤に、「それに規定された形」(ibid.163)で相互独立的自己観を「意味づけ取り入れ」る「2次的反映過程」(ibid.171)が起こるのではないかと論じている。

しかし、本調査では、9「いつも自信をもって発言し、行動している」の1問を除くと、30代以降の社会人に相互独立性の上昇はみられなかった。スウェーデン人と比較すると、日本人の相互独立性の全体的な低さは明確である。自尊感情についてみた通り、加齢に伴う自信の上昇は普遍的な現象であり、これだけをもって日本的な「2次的反映過程」と解釈するのは難しいと考える。

相互協調性についてみると、他者の視線への懸念といった内的なセンシティブさは、スウェーデン人でも加齢とともに低下する傾向が伺える。だが、日本の特質はその度合がより顕著なことで、社会人は若者に比べて急速に鈍感になる。

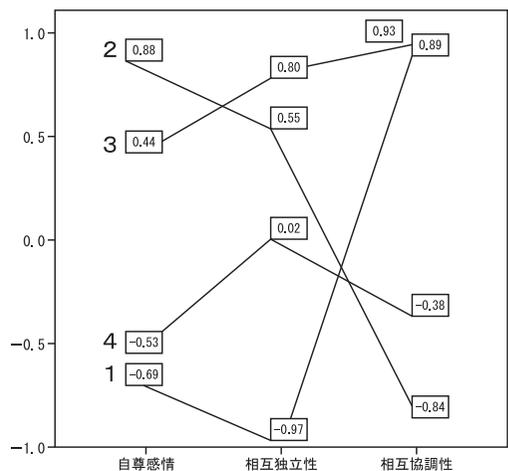
大塚他(2011b)では、スウェーデン人に比べた日本人の内的センサリングの低さについて、外的な同調に対する志向が強いからだと解釈した。しかし、本稿でより詳細に検討した結果、前者は加齢に伴う低下が顕著なのに、後者には年代差がないことが分かった。他者に対するセンシティブさの年代による変化は、おそらく自尊感情の上昇に関連していると推測される。相互独立性－相互協調性と自尊感情の関係については、今後の課題としてさらに追求していきたい。

4. 大学生の多様性と4クラスター

相互独立性と相互協調性は、一方が優勢なら他方が微弱である傾向が一般的だが、双方とも高水準あるいは低水準である事例が存在する(高田[2004:145])。我々の調査のスウェーデン人も、日本人と比較すると、どちらも高水準にあるといえる。日本人は全体としてみれば前者が低く後者が高いが、そうでない一群も存在するだろう。ま

た後に表4に示す通り、日本の大学生は他のグループに比べ、心理尺度の標準偏差が大きい。つまり、グループ内の多様性が大きいということだ。

そこで文教大生の特徴をより詳細に理解するために、本調査と追加調査を統合した学生327名に対し、自尊感情と文化的自己観の得点を投入してWard法によるクラスタ分析を行った。結果として、欠損値を除く320名が4クラスターに分類された。以下に各クラスターの標準化得点による平均値を示す(グラフ8)。



グラフ 8 自尊感情と文化的自己観尺度による4クラスター

分散分析の結果、各クラスターの男女比と年齢に有意差はなかった。グラフから伺える通り、自尊感情と相互独立性はほぼ連動しているが、相互協調性はこの2つと独立的な動きを示している。

第1クラスターは、低い自尊感情と相互独立性＋高い相互協調性という、文化的自己観が本来「日本的」と想定する性質を示す。全体の28.4%(91名)に上り、2番目に大きい。「真日本人」クラスターと名づける。

第2クラスターは、第1と真逆で、高い自尊感情と相互独立性＋低い相互協調性と、およそ「日本人らしくない」。意外なことに、これが全体の32.5%(104名)を占める最大グループだった。「強気」クラスターと名づける。

第3クラスターは、3尺度全てが高水準にあり、

表4 各グループの平均値* () 内は標準偏差

グループ	自尊感情	相互独立性	相互協調性
スウェーデン人	37.5 (5.40)	4.9 (.85)	4.6 (.80)
日本人教員	33.3 (5.99)	4.0 (.81)	4.6 (.69)
日本人福祉	28.8 (6.74)	4.0 (.85)	4.4 (.64)
日本人大学生	26.0 (7.08)	4.0 (1.03)	4.9 (.86)
第1クラス (真日本人)	21.1 (5.72)	3.0 (.81)	5.7 (.52)
第2クラス (強気)	32.2 (4.94)	4.6 (.87)	4.2 (.70)
第3クラス (スウェーデン人的)	29.1 (4.03)	4.9 (.60)	5.7 (.43)
第4クラス (不活性)	22.3 (5.20)	4.0 (.64)	4.6 (.40)

本調査のスウェーデン人に類似した特性をもつ。これは12.5% (40名) しかおらず、最小グループだった。「スウェーデン人的」クラスと名づける。

第4クラスは、3尺度全てがやや低水準にある。「不活性」クラスと名づける。全体の26.6% (86名) である。

本調査のスウェーデン人と日本の社会人、本調査と追加調査を含む全日本人大学生を含めて、3つの心理尺度の平均値と標準偏差を一覧にして示す (表4)。

第2「強気」クラスの自尊感情は、スウェーデン人には遠く及ばないものの、日本人教員に迫る高さである。そして相互独立性は日本の社会人よりかなり高く、むしろスウェーデン人に近い。相互協調性は全ての中で最低である。自分に自信をもち、あまり他者を気にしない学生といえよう。

これが最大グループで全体の3割強を占めるにも関わらず、それに次ぐ3割弱の第1「真日本人」クラスの21.2という他とかけ離れた自尊感情の低さが、大学生全体の平均値を引き下げている。このグループは第3「スウェーデン人的」クラスと並び、相互協調性が5.7と突出して高く、他者の視線や評価を気にし、懸命に周囲に同調しようと努めている。

これに対し、第3「スウェーデン人的」クラスは、自尊感情が社会人並みに高く、相互独立性に至ってはスウェーデン人と並ぶ。彼らの相互協調性の高さは、心理的余裕の現れなのかもしれない。

第4「不活性」クラスは、相互独立性も相互協調性も平均的で、自尊感情だけが低い。

大学生のクラスによる分散分析で、QOL平均は、最高の「強気」が3.5、「不活性」が3.0・「真日本人」2.9で、前者と後2者の間に有意差があった ($p<.001$)。各下位領域もほぼ同様の傾向である。これは1-(1)の重回帰分析でみた自尊感情とQOLの関連の強さからも、頷ける結果といえる。

これに対し、対人信頼感、最高がやはり「強気」だが50.3にとどまり、日本の教員53.4・福祉52.7に比べると低い。他の3クラスは46台で、「強気」と前者と4「不活性」の間のみ有意差があった。しかし、自尊感情や文化的自己観尺度に比べると、大学生の内的な差異が小さい。特に3尺度が全て高水準にある「スウェーデン人的」でも、特に高くないことが注目される。自尊感情の高さにあまり関係なく、とにかく大学生であることが対人信頼感を低下させているということだ。これがなぜなのか、今後の課題としてさらに追求していきたい。

5. 結語と課題

本稿では、我々が共同で行った日本とスウェーデンの比較調査中の3つの心理尺度に関して、特に年代差に注目した分析を行った。その結果、自尊感情と対人信頼感の双方で、日本のみ年齢や大学生であることがマイナスの影響をもつことが分

かった。次に、文化的自己観尺度については、相互独立性では年代差が少なく、スウェーデン人が日本人より著しく高いという大塚他（2011b）の分析を再確認した。これに対し、相互協調性の6間には年齢の影響が強いことが分かった。中でも日本の社会人が、大学生に比べて急速に他者への内的なセンシティブさを失う傾向が注目される。最後に、全体としてネガティブな傾向を示す大学生にクラスタ分析を行ったところ、最大グループが自尊感情・相互独立性がともに高く相互協調性の低い「強気」クラスタであるという意外な結果が得られた。

以上の分析を通じて、今後に残された課題は多い。なぜ日本の大学生と社会人は文化的自己観尺度に関して、スウェーデン人より著しく違いが大きいのだろうか。また大学生における「強気」と「真日本人」という対照的なクラスタの規定要因は何か。これらの問いは、我々の比較調査のデータのみでは十分に答えることが難しい。新たな調査を企画し、解明していきたいと考えている。

引用文献

- 藤野文代・林かおり・前田三枝子・深川ゆかり
1999「大学生のバーンアウトに関する研究～PIL, Self-Esteem, タイプA尺度による分析～」、『群馬保健学紀要』20, 97-102
- 堀洋道監修／吉田富二雄編 2001『心理測定尺度集Ⅱ』、サイエンス社
- 星野晴彦・大塚明子・秋山美栄子・森恭子 2011「日本とスウェーデンの援助規範意識比較に関する研究～福祉政策に影響する両国の援助規範意識の特性に着目して」、『生活科学研究』34
- 伊藤正哉・小玉正博 2005「自分らしくある感覚（本来感）と自尊感情がwell-beingに及ぼす影響の検討」、『教育心理学研究』53, 74-85
- 桂田恵美子 2009「大学生の愛情の枠組みと自尊感情・対人信頼感との関係」、『関西学院大学『人文論究』59（2）, 30-41
- 河地和子 2005『自信力が学生を変える～大学生意識調査からの提言～』、平凡社新書
- 黒田祐二・有年恵一・桜井茂男 2004「大学生の親友関係における関係性高揚と精神的健康との関係～相互協調的～相互独立的自己観を踏まえた検討～」、『教育心理学研究』52, 24-32
- Markus, H.R., & Kitayama, S. 1991 Culture and the self: Implications for cognition, emotion and motivation, *Psychological Review*, 98, 224-53
- 新見直子・川口朋子・江村理奈・越中康治・目久田純一・前田健一 2007「青年期における自己愛傾向と自尊感情」、『広島大学心理学研究』7
- 岡田努 2011「現代青年の友人関係と自尊感情の関連について」、『パーソナリティ研究』20（1）, 11-20
- 大塚明子・秋山美栄子・森恭子・星野晴彦 2011a「(研究ノート) 価値観・労働観・ライフスタイル等に関する日本と北欧の比較調査研究 第1次報告」、『人間科学部紀要』33号
- 大塚明子・秋山美栄子・森恭子・星野晴彦 2011b「『集団主義の日本』と『個人主義のスウェーデン』の再検討～心理尺度を用いた比較調査を通じて～」、『北ヨーロッパ研究』8
- 佐久間路子・無藤隆 2003「大学生における関係的自己の変異性と自尊感情との関連」、『教育心理学研究』51, 33-42
- 塩澤聖子 2008「大学新入生を調査対象とした大学生用ソーシャルサポート尺度の作成」、『学校メンタルヘルス』11, 33-42
- 菅佐和子 1984「SE (Self-Esteem) について」、『看護研究』17(2), 21-27,
- 鈴木有美 2002「自尊感情と主観的ウェルビーイングからみた大学生の精神的健康～共感性およびストレス対処との関連～」、『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要』49, 145-155
- 高田利武 2004『『日本人らしさ』の発達社会心理学～自己・社会的比較・文化～』、ナカニシヤ出版
- 高田利武 2007「文化的自己観尺度の諸問題～尺度値の意味と自尊心との関係～」、『宮城学院女子大学 研究論文集』105, 113-27
- 豊田弘司 2006「大学生の自尊感情と自己効力感に及ぼす随伴・非随伴経験の効果」、『奈良大学『教育実践総合センター研究紀要』15, 7-10
- 山崎理央・三宅幹子・橋本優花里・平仲二・松田

文子 2005「大学生へのピア・サポート訓練
による自尊感情や自己開示、社会的スキルへの

効果の検討」、『福山大学人間文化学部紀要』5,
19-30